

高校生の喫煙、飲酒、薬物乱用の実態と生活習慣に関する定点追跡調査研究 一定点高校の生徒における平成 23 年度と平成 25 年度の調査について一

鳴門教育大学大学院学校教育研究科 教授 吉本 佐雅子
兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授 鬼頭 英明
兵庫教育大学大学院学校教育研究科 教授 西岡 伸紀

1. 研究背景

わが国では、1990 年代後半から第 3 次覚せい剤乱用期と呼ばれる薬物乱用の流行が起り、中学生・高校生などの若年層や女性など、従来薬物汚染の少なかった層にまで薬物乱用が浸透した。政府は平成 10 年「薬物乱用防止 5 か年戦略」のもとに総合的対策を開始、その後も平成 15 年、20 年に 5 か年の薬物乱用防止戦略を策定し、継続した対策強化を進めてきた。これらの国家的戦略では、いずれも目標の第一に青少年への薬物乱用防止対策を挙げており、一次予防の視点から、学校教育による青少年の薬物乱用の根絶が必須の課題となっている。

薬物乱用防止に有効な健康教育プログラムの構築をめざし、我々はこれまでに薬物乱用、喫煙、飲酒（以降文中、危険行動と記載）の実態、背景・要因についての大規模のモニタリング調査研究（平成 16、18、21 年度に実施、調査年度毎に地域、環境の異なる高校の生徒を対象）を行ってきた。さらに実態の変化の実証性を高め、現代社会の急激な変化に伴い刻一刻と変化する薬物乱用の実態、背景要因の動向を捉えるためには定点での薬物乱用実態の継続的追跡、その背景要因のモニタリング的疫学調査（定点追跡調査）の研究が必要と考えられた。

2. 研究の目的

研究の主な目的は以下の 2 つが挙げられる。

- (1) 定点高校（全生徒に調査）について 2 時点（平成 23 年度、25 年度）の調査を行い、2 年間の危険行動の実態および生活行動・環境等の背景要因の変化、それらの関連性の変化について分析し、具体的危険因子を見い出す。
- (2) 従来、薬物乱用の大規模な調査では、対象者の調査協力を得る事が最も大きな課題となっている。本研究での定点校（調査協力校）の確保の方法は、今後の同法調査の実施モデルとして提示するものである。

3. 研究の方法

本研究は科学研究費補助金「基盤研究(B)高校生の薬物乱用と背景要因についての定点追跡調査研究（研究代表 吉本佐雅子 鳴門教育大学）」（採択期間平成 22～25 年度）の交付によって行った。調査の実施及び集計は新情報センターが行った。

（1）研究の概要

4 年間（科研採択期間）のスケジュールは以下のとおりである。

1 年目：定点校の確保（高校への調査協力依頼）

2 年目（平成 23 年度）：初回「喫煙、飲酒、薬物乱用についての意識・実態調査」

実施

3年目：報告書作成、結果返却、
4年目（平成25年度）：2回目（初回と同じ）調査を実施

（2）定点校の確保

協力（2回の調査実施）参加を依頼する高校（協力依頼対象高校）700校を全国の高校から層別一段集落法にて抽出し、これらの高校を3時期に分けて予定校数になるまで順次依頼を行うこととした。その結果、一次は依頼163校のうち32校が、その後行なった2次では依頼155校のうち28校に協力参加の回答をいただき、この時点で計60校から定点校として調査実施の協力が得られた。

（3）調査実施方法

各定点校の全生徒を対象に「喫煙、飲酒、

薬物乱用についての意識・実態調査」（質問項目数104）を無記名の自己記入式質問法で実施した。なお、この調査研究の各作業において、個人、学校の個人情報、プライバシーの保護を徹底して行った。

（4）対象者数

確保された定点校から実際に平成23年度と平成25年度の両年度の調査を実施できたのは49校であった。東日本大震災の被災校6校、その他の理由で5校の実施を取りやめたものである。

両年度とも49校からの回収率（調査票回答者数/在籍生徒数）は96.0%、有効回答（分析可能回答数/調査票回答者数）率99.6%であった。表1に分析対象者数を示す。平成23年度は32,259名、平成25年度は32,458名であった。各年度の性・学年構成率はほぼ同様であった。

表1 対象者数（定点49校の全生徒）（有効回答者数）

	男性		女性		計	
	人数	%	人数	%		
H23年度 (初回調査)	1年生	5,146	(34)	5,991	(35)	11,137
	2年生	5,158	(34)	5,833	(34)	10,991
	3年生	4,768	(32)	5,363	(31)	10,131
計		15,072	(100)	17,187	(100)	32,259
H25年度 (2回目調査)	1年生	5,261	(35)	6,107	(35)	11,368
	2年生	5,122	(34)	5,937	(34)	11,059
	3年生	4,590	(31)	5,441	(31)	10,031
計		14,973	(100)	17,485	(100)	32,458

（5）分析方法

①分析項目

以下の3点について、男女別に平成23

年度と平成25年度を比較した。

- a) 「薬物乱用、喫煙、飲酒の実態（経験頻度）」

各々、これまでに1回以上経験した事があるものを生涯経験者とし、この1年の間に1回以上経験した事があるものを年経験者とした。また、シンナー、覚せい剤、大

麻、MDMA のいずれかを経験したものを合わせて薬物乱用経験者として示した。分析に用いた質問項目、質問文は以下のとおりである。

＜質問項目＞

○シンナー、覚せい剤、大麻、MDMA(合成麻薬)、タバコ、お酒について各々

＜質問文（簡略形）＞ これまでに1回でも・・・を使用した事があるか？（ある場合は、始めて使用した時の年齢を選ぶ）

- ＜選択肢＞ 1. 経験なし 2. 10歳以下 3. 11歳
 4. 12歳 5. 13歳 6. 14歳
 7. 15歳 8. 16歳 9. 17歳
 10. 18歳以上 11. 経験はあるが年齢は覚えてない

○シンナー、覚せい剤、大麻、MDMA(合成麻薬)について各々

＜質問文（簡略形）＞ この1年間に1回でも、経験した事があるか？

- ＜選択肢＞ 1. ない 2. ある

○喫煙、飲酒について各々

＜質問文（簡略形）＞ この1年間に、何回経験したか？

- ＜選択肢＞ 1. 一度もなし 2. 1年間で1～数回 3. 月に数回
 4. 週に数回 5. ほとんど毎日

b) 「薬物乱用、喫煙、飲酒と背景要因との関連性」

本研究の第1段階の報告として、背景要因は2004年に同様に実施された調査の報告（三好ら、学校保健研究、50巻、2009）において上記の経験有無と密接な関係を示した次の6つのライフスタイル関連要因（「朝食摂取」、「学校生活の楽しさ」、「クラブの参加状態」、「アルバイトの週平均時間」、「大人が不在の状態で過ごす1日平均時間」、「悩みごと等を親に相談する方か」）について同様に分析する事とした（各々の選択肢は8ページ表7参照）。

c) 「背景要因のH23からH25年の変化」

②統計分析方法

2変数の関連性は χ^2 検定を行い、クラメ

ールの関連係数V（ $0 \leq V \leq 1$ 、正負なし）を算出した。なお、今回分析した薬物等と背景要因との関連性（2変数間の関連性）は、すべて、正（不良な状態の群に不良な状態の者の出現率が高い）であった。年度と各背景要因との関連性においては、すべて平成25年度では平成23年度より良好側にシフトしていたことを確認した。この係数は大きいほど関連性が強い事を示し、異なった群での関連性の強さを比較できる。また、「有意」は検定において差あるいは違があると判定された事を意味する。

4. 研究成果

（1）薬物乱用、喫煙、飲酒の実態（経験頻度）の変化

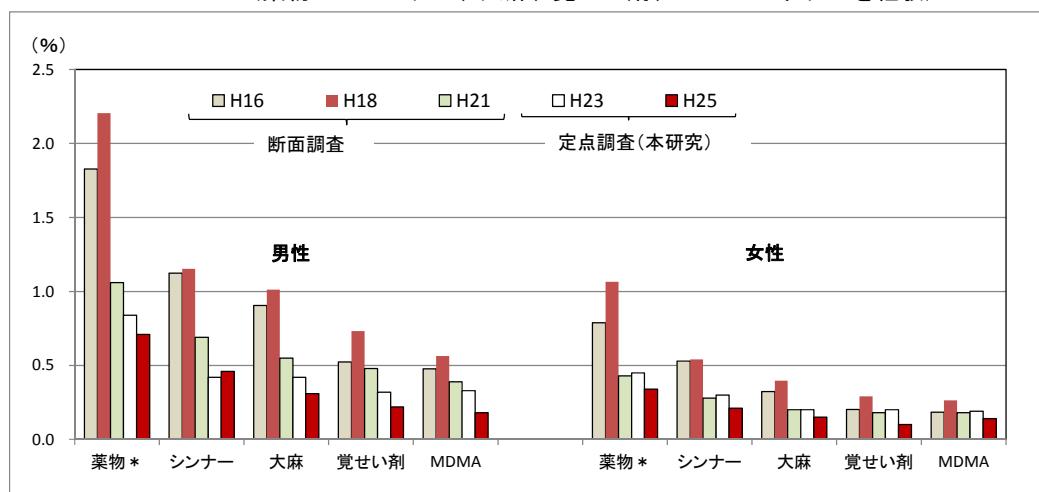
①平成 23 年度および平成 25 年度の定点調査における薬物乱用、喫煙、飲酒の生涯経験者、年経験者の出現率

3 つの危険行動（経験者）の特性を出現率でみると、全体として薬物が 1 %未満、喫煙は約 10%以下、飲酒は 40%前後で、飲酒が最も高く、次いで、喫煙、薬物乱用であった。また、男女の違いについてみると、薬物乱用、喫煙の出現率は男性で高いが、

表 2 薬物乱用、喫煙、飲酒の経験者出現率(%)

		H23	H25
薬物乱用	生涯経験	男性	0.8
		女性	0.5
	全体	0.6	0.5
年経験	男性	0.7	0.4
	女性	0.4	0.3
	全体	0.5	0.3
喫煙	生涯経験	男性	13.4
		女性	8.7
	全体	10.9	8.0
年経験	男性	6.6	5.2
	女性	4.2	2.3
	全体	5.3	3.6
飲酒	生涯経験	男性	52.4
		女性	53.3
	全体	52.9	43.4
年経験	男性	38.9	30.7
	女性	41.0	30.6
	全体	40.0	30.6

図 1 薬物乱用生涯経験者の出現率の年次推移
(薬物 * : シンナー、大麻、覚せい剤、MDMA のいずれかを経験)



飲酒では男女間に差はなく、ほぼ同率（平成 23 年度では女性が高い）であった。このような特性はこれまでの調査結果においても認められている。

危険行動の平成 23 年度から平成 25 年度の変化は、全体として、薬物乱用の生涯経験者は有意ではないが 0.6%から 0.5%に、年経験者は 0.5%から 0.3%に減少した。喫煙の生涯経験者は 10.9%から 8.0%に、年経験者は 5.3%から 3.6%に減少した。飲酒の生涯経験者は 52.9%から 43.4%に、年経験者は 40.0%から 30.6%に減少した。喫煙と飲酒のこれら経験者率の減少は有意であった。

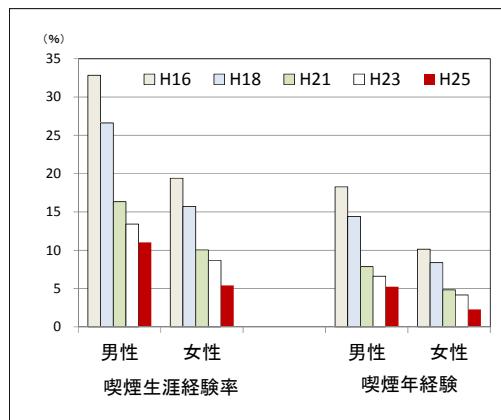
②薬物乱用（生涯経験）、喫煙、飲酒出現率の平成 16 年からの時系列推移

図 1（薬物乱用）、図 2（喫煙）、図 3（飲酒）に、本研究調査年度を含めた平成 16 年度から 5 時点の時系列推移を示した。平成 16、18、21 年度の出現率は、各年度で対象高校は異なるが対象生徒数各年度 3～5 万人で、本研究と同様に我々が全国規模で行った断面調査からの結果である。

薬物乱用生涯経験者は図1に示すように、全体的な傾向としては平成18年度をピークに、その後平成21年度には大きく減少するが、平成23年度、平成25年度の減少は緩慢になっていることがわかる。

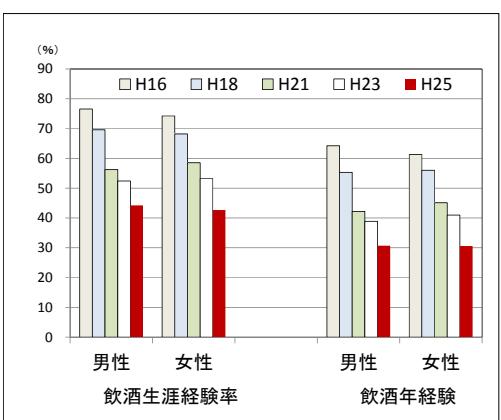
喫煙経験者は図2に示すように、平成16年度より平成25年度まで順次顕著に減少しており、定点調査期間（平成23から25年度）での減少傾向に大きな変化はみられない。

図2 喫煙経験者出現率の年次推移



飲酒経験者は図3に示すように、喫煙の年次推移と同様に、平成16年より平成25年まで順次顕著に減少しており、定点調査期間（平成23から25年度）での減少傾向に大きな変化はみられない。

図3 飲酒経験者出現率の年次推移



(2) 薬物乱用と喫煙、飲酒との関連性

薬物乱用と喫煙、飲酒との関連性を表3に示した。各年度、男女ともに、喫煙頻度が多い者、飲酒頻度が多い者は有意に薬物乱用に至り易い事が示された。薬物との関連性は喫煙よりも飲酒と関連性が強い。また、喫煙、飲酒とともに、薬物乱用との関連性は男性よりも女性で強いことがわかる。女性での喫煙との関連性を除き、これらの関連性は、平成23年度に比べ、平成25年度で若干ではあるが弱くなる傾向がみられる。

表3 薬物生涯経験有無と喫煙、飲酒経験頻度との関連性
(クラメールの関連係数V:本文3ページ②統計分析方法参照)

	H23		H25	
	男性	女性	男性	女性
喫煙年間頻度	0.202	0.235	0.190	0.239
飲酒年間頻度	0.255	0.351	0.228	0.245

これらの関連性の一部（平成23年度）を図4（喫煙と薬物）、図5（飲酒と薬物）に示した。喫煙においても、飲酒においても年数回から週数回にかけて、薬物乱用経験者が多くなる傾向があり、ほとんど毎日で顕著に多くなっている。特にほとんど毎日飲酒する女性ではその半数が薬物を経験していた。これらの関連性の傾向は平成25年度においても同様にみられた。<図4、図5>

図4 喫煙頻度群別 薬物乱用生涯経験者率(平成23年度)

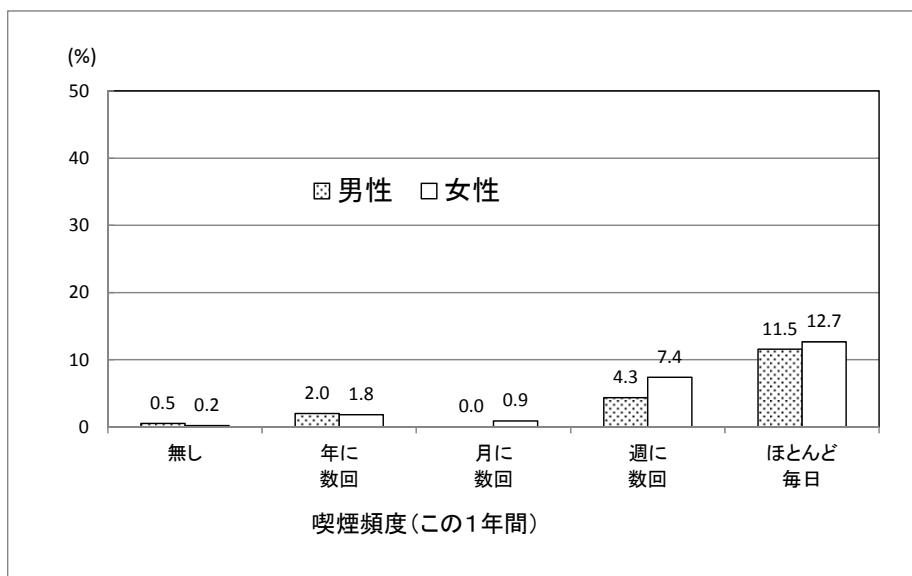
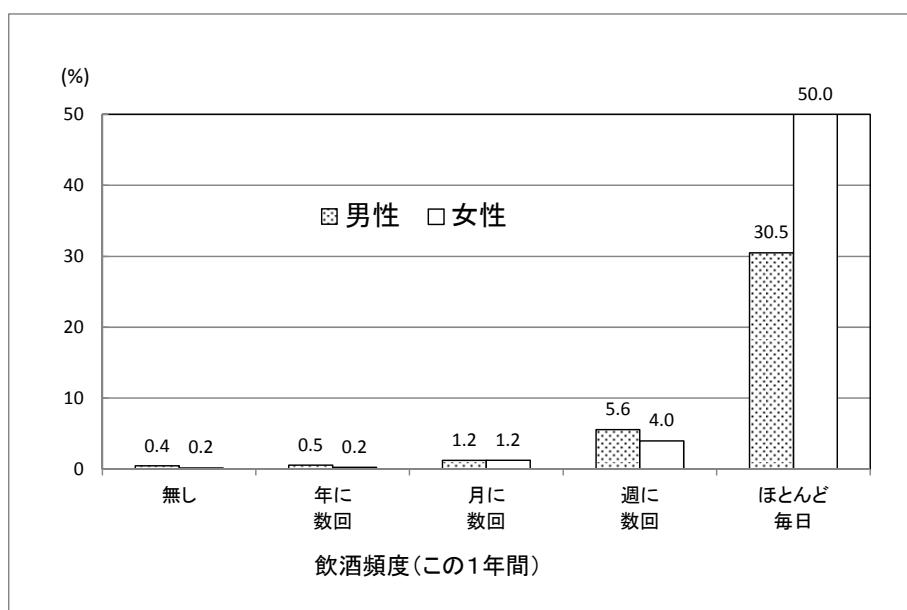


図5 飲酒頻度群別 薬物乱用生涯経験者率(平成23年度)



(3) 薬物乱用、喫煙、飲酒と背景要因との関連性

背景要因は同様の調査を行った2004年度の分析から、薬物乱用、喫煙、飲酒経験と密接な関係を示した6つのライフスタイル

関連要因（「朝食摂取」、「学校生活の楽しさ」、「クラブの参加状態」、「アルバイトの週平均時間」、「大人が不在の状態で過ごす1日平均時間」、「悩みごと等を親に相談する方か」）について同様に分析する事とした。

背景要因と、薬物乱用との関連性は表4に、喫煙との関連性は表5に、飲酒との関連性は表6に示した（クラメールの関連係数Vは本文3ページ②統計分析方法参照）。表4、表5、表6に示した背景要因との関連性はすべて有意であった。別途詳細に関連性をみたところ、各要因が不良側の者に薬物乱用、喫煙、飲酒の経験者が多いという傾向であった。

表4 薬物生涯経験と背景要因との関連性

	H23		H25	
	男性	女性	男性	女性
朝食摂取	0.054	0.104	0.034	0.079
学校生活の楽しさ	0.087	0.111	0.052	0.086
クラブの参加への積極性	0.047	0.048	0.033	0.035
アルバイト時間	0.092	0.097	0.103	0.092
大人不在で過ごす時間	0.033	0.038	0.033	0.025
悩みごとなど親に相談	0.100	0.146	0.067	0.132

表5 喫煙年経験と背景要因との関連性

	H23		H25	
	男性	女性	男性	女性
朝食摂取	0.133	0.177	0.123	0.121
学校生活の楽しさ	0.119	0.156	0.112	0.120
クラブの参加への積極性	0.123	0.154	0.101	0.109
アルバイト時間	0.218	0.238	0.210	0.199
大人不在で過ごす時間	0.101	0.121	0.084	0.095
悩みごとなど親に相談	0.084	0.112	0.078	0.097

表6 飲酒年経験と背景要因との関連性

	H23		H25	
	男性	女性	男性	女性
朝食摂取	0.089	0.104	0.074	0.110
学校生活の楽しさ	0.041	0.064	0.044	0.076
クラブの参加への積極性	0.067	0.126	0.046	0.120
アルバイト時間	0.151	0.229	0.156	0.211
大人不在で過ごす時間	0.081	0.120	0.081	0.105
悩みごとなど親に相談	0.070	0.074	0.066	0.070

表4、表5、表6における関連性の強さを概観してみていくと、薬物乱用、喫煙、飲酒と背景要因との関連性は、男女ともに平成23年度より平成25年度で全体として若干弱まる傾向があるが、大きな違いはなく、両年度で今回検討した背景要因の危険性は変わらないと言える。

薬物乱用には親に相談できないことが比較的強い危険因子として認められたが、その他の因子との関連性は、喫煙、飲酒との方がより強い傾向がみられる。喫煙、飲酒にはアルバイトの時間が長いこと、朝食摂取頻度が少ないことが比較的強い危険因子としてみられる。

背景要因と喫煙、飲酒との関連性は全体として、男性より女性において強い傾向がある。特に、飲酒へのアルバイト時間の長さ、クラブへの参加状態の影響は男性より女性において大きいことが示された。

(4) 背景要因の平成23年年度から平成25年年度の変化

表7に背景要因の変化として、各質問項目の選択肢の回答出現率の変化を示した。喫煙、飲酒への危険要因として認められた「朝食摂取」、「アルバイトの週平均時間」に変化は見られない。「学校生活の楽しさ」、「クラブの参加状態」、「大人が不在の状態で過ごす1日平均時間」、「悩みごと等の親への相談」は良好側に回答する者が多くなり、改善傾向が認められる。これらの出現率自体の差は小さいが対象者が多いため、統計分析において有意の変化と認められるものである。

表 7 背景要因の平成 23 年度と平成 25 年度の比較（選択回答出現率%）
(*:男女ともに統計分析において平成 25 年度で有意に改善されたと認められた項目)

	H23	H25
朝食摂取	毎日	85.0
	時々	9.1
	ほとんどなし	5.8
	合計	100.0
学校生活の楽しさ	とても楽しい	35.9
	どちらかと言えば楽し	47.9
	あまり楽しくない	12.3
	全く楽しくない	4.0
	合計	100.0
		100.0
クラブの参加状態	積極的に	57.6
	消極的	11.8
	参加していない	30.6
	合計	100.0
アルバイト時間 (週平均)	なし	84.1
	5時間以下	3.1
	5~10時間	4.4
	11~20時間	5.1
	20時間以上	3.4
	合計	100.0
大人不在で 過ごす時間	なし	33.0
	1時間未満以下	19.7
	1~2時間未満	17.1
	2~3時間未満	11.6
	3時間以上	18.6
	合計	100.0
悩みごとなど 親に相談	よくする	18.9
	どちらかと言えばする	29.7
	どちらかと言えばしない	19.7
	ほとんどしない	31.0
	親不在	0.7
	合計	100.0
		100.0

（5）考察

本研究の大規模な定点追跡調査研究では、我が国高校生の実態の代表値を得、同一の生徒集団において 2 回の調査を行う事で、期間変化について、対象集団の地域、環境等による誤差を除いて把握する事ができた。

全体として、各危険行動（薬物乱用、喫煙、飲酒）の生涯経験者は飲酒が約 5 割、喫煙が約 1 割、薬物乱用は 1 % 未満であり、平成 23 年度から平成 25 年度の 2 年間の減少の程度（平成 23 年度のレベルを加味して）も飲酒、喫煙、薬物乱用の順に大きかった。これらいずれの危険行動の減少も、平成 18 年度から平成 21 年度の減少傾向に継続し

てみられた。

7 年前、平成 16 年度の同様の調査においてこれら危険行動に密接に関係する背景要因として認められた 6 つの背景要因（「朝食摂取」、「学校生活の楽しさ」、「クラブの参加状態」、「アルバイトの週平均時間」、「大人が不在の状態で過ごす 1 日平均時間」、「悩みごと等を親に相談する方か」）は、平成 23、25 年度（本調査）においても同様に認められ、また、2 年間でこれら背景要因との関連性に変化はみられなかった。

これら背景要因との関連性は、薬物よりも、喫煙、飲酒と強くみられた。これより、薬物乱用とこれら背景要因との関連性は、直接的な関連性と言うよりも、喫煙、飲酒との関連性を介して現れている事が示唆された。以上の定点校の高校生における結果は、喫煙、特に飲酒は薬物乱用への危険性が高い背景要因となっていることを裏付けるものである。飲酒は、その頻度が多いものは飲酒が生活習慣の一部となり、薬物乱用の危険性の高い背景要因として位置付けられる。平成 23 年度から平成 25 年度に薬物乱用をする者が減少していたが、この一因に飲酒、喫煙経験者の顕著な減少が関わっている事が示唆できた。

平成 23 から平成 25 年度にかけ、「学校生活の楽しさ」、「クラブの参加状態」、「大人が不在の状態で過ごす 1 日平均時間」、「悩みごと等を親に相談する方か」には良好傾向がみられ、喫煙、飲酒の 2 年間の減少の一因となっている事が示唆された。他方、喫煙、飲酒に強い関連性を示した「朝食摂取状況」、「アルバイトに費やす時間」などの具体的な行動の要因については、変化はみられなかった。今回取り上げた背景要因はそのことが原因であると言うより、危険性が高い状況にある、と捉える事が重要で

あり、そのような状況下にあっても、危険行動を起こさないようにするための健康教育の必要性を更に支持するものである。

5. 謝辞

調査実施にご協力をいただきました高校の教職員、生徒の皆様、調査実施にご理解、ご支援をいただきました教育関係機関に厚く御礼を申し上げます。

筆者(研究代表)プロフィール

吉本 佐雅子 (よしもと さちこ)

鳴門教育大学大学院学校教育研究科教授、博士（医学）。神戸女子薬科大学修士課程修了後、兵庫医科大学を経て、平成9年より鳴門教育大学大学院に着任、現在に至る。

「高校生の薬物乱用と背景要因についての定点追跡調査研究」研究代表を務める。

主な著書、論文は次の様である。

著書（共著、共編）：「学校で取り組む薬物乱用防止教育」（ぎょうせい、2000年）、論文（共著）：「わが国の高校生における飲酒の実態と喫煙、薬物乱用との関連性－飲酒の経験頻度および飲酒の機会について－」（教育医学、2010年・56巻・2号・pp. 128-145）

